本のひろば

［月刊］キリスト教書評誌

July 2023 7

ISSN 0286–7001
一般財団法人キリスト教文書センター
1957年7月17日第三種郵便物認可
2023年7月1日発行（毎月一回1日発行）第787号

●出会い・本・人
『韓国現代史と教会史』からの巡りあわせ　大西晴樹

●特集 三位一体を学ぶなら
この三冊＋α！　坂井純人
『アウグスティヌス著作集』完結記念誌上インタビュー　金子晴勇

●本・批評と紹介
安酸敏眞著　「キリスト教学」の探究　片柳榮一
在日本韓国YMCA編　交差するパレスチナ　岩城聰
小高毅、堀江知己訳　オリゲネス 創世記説教　富田雄治
小見のぞみ著　非暴力の教育　小林よう子
富坂キリスト教センター編　戦争と平和主義　西原廉太
大頭眞一著　神さまの宝もの　齋藤篤
ヘンリ・J・M・ナウエン著／友川榮編訳　イエスの示す道　川上直哉
荒川朋子著　共に生きる「知」を求めて　色平哲郎
松谷好明著　〈ウェストミンスター信仰告白〉歴史的・分析的註解　相馬伸郎
辻直人著　湯浅八郎の留学経験　吉田亮
鈴木範久著　聖書語から日本語へ　加藤常昭

近刊情報
書店案内

新教出版社　〒162-0814 東京都新宿区新小川町 9-1　Tel: 03-3260-6148 / Fax: 03-3260-6198
HP：http://www.shinkyo-pb.com、メール：eigyo@shinkyo-pb.com

日本におけるキリスト教フェミニスト運動史

1970年から2022年まで

富坂キリスト教センター 編

この半世紀余の激動の時代を、詳細な年表と解説、コラム記事で丹念に辿る。また4人の女性の証言とインタビュー、さらにメディア表象、女性への按手の進展、結婚式文の問題、異性愛規範への抵抗など6つの重要課題を考察。本書は画期的な労作であり、今後この分野を論じる上で不可欠の文献となるだろう。学校・教会に必備。

◆B5判・定価2750円

5月25日

第一ペトロ書を読む

釈義と説教

石田 学 著

広大なローマ帝国の辺境で少数者の立場に置かれ、差別と迫害に苦しむキリスト者に向けて自らの信仰と倫理を力強く語る一ペトロ書。そのメッセージを、《釈義》と《説教》の2部構成で、現代の私たちに生き生きと伝える。信徒にも説教者にもよき学びとなる。

◆四六判・定価2200円

【既刊】石田 学 著　エフェソ書読む　釈義と説教

初代教会内に生じた多様性を多様性として認めつつ、キリストにある一致を求め続けた信仰の先達たちの声を、丁寧に聴き取る。

◆四六判・定価2200円

ユダヤ人も異邦人もなく

山口希生著　パウロ研究の新潮流

パウロの宣教とは？

信仰義認を重視する従来のパウロ理解に異議を申し立て、20世紀後半から新約学界で激しい論議を呼んでいる「パウロへの新しい視点」（NPP）。本書は19世紀のバウルから21世紀のバークレーまで解説。本邦初のNPP本格入門書。

大反響

◆四六判・定価2475円

神と上帝

5月25日　◆A5判・定価4400円

金香花著　聖書訳語論争への新たなアプローチ

19世紀中国での聖書翻訳における訳語論争を手掛かりに、その後の朝鮮語と日本語における聖書翻訳とを比較、さらに、それを近年の発達めざましい聖書翻訳理論と付き合わせ、そもそも聖書翻訳とは何かに迫った意欲的な研究。

出会い　本　人

『韓国現代史と教会史』からの巡りあわせ

――大西晴樹

明治大学大学院の指導教授であった倉塚平教授のもとで、E・トレルチの『社会教説』を読んでいた頃、韓国民主化運動を熱心に支援していた指導教授から盛んに薦められたのが池明観著『韓国現代史と教会史』（新教出版社・一九七五）であった。

私の専門はイギリス社会経済史であるが、本書がきっかけで、不思議なことに、教会の門を叩くことができ、著者である池先生と教会で交わることになり、教員になってからも、キリスト教史学会を通じて、韓国教会史の研究者との交わりが続いている。

本書には、戦前戦中の日本による植民地支配のもとで、キリスト教会がナショナリズムの担い手の役割を果たしており、それが軍事独裁に抗する民主化運動に流れ込んでくるという韓国の現代史と教会史が描かれており、日本や中国におけるキリスト教の受容の違いに驚きを禁じ得なかった。教会に通って聖書を読むことを指導教授から薦められた折に、中目黒の恵泉バプテスト教会の藤田英彦牧師があえて祈祷会後に青年会による本書の読書会を開いてくれたことも、私にとっては教会の敷居を低く感じさせた一因である。

当時東京女子大学の客員教授をされていた池先生は、恵泉バプテスト教会の特別伝道集会の講師として来会し、求道中の私を東山荘で開催される学生ＹＭＣＡ夏期学校に誘ってくださった。私が教員になってからもキリスト教学校教育同盟大学部会の講師を引き受けてくださり、一九八六年からは先生が晴れて帰国するまでの七年間、姜貞淑夫人とともに恵泉バプテスト教会の客員会員となり、毎週のように交わることになった。

そんなことから、二〇〇八年に、日韓キリスト教史の研究者である徐正敏延世大学教授を前任校である明治学院大学の客員教授に招聘することができた。本書は、西洋のキリスト教の探求というルートに加えて、アジアのキリスト教との出会いというルートを用意してくれたのである。

（おおにし・はるき＝東北学院院長、大学学長）

三位一体を学ぶなら
▼この三冊＋α！

坂井純人（さかい・すみと：日本キリスト改革長老教会東須磨教会牧師、神戸神学館教師、神戸改革派神学校講師）

キリスト教信仰の真髄は、主イエス・キリストこそが、真の神であり、かつ、同時に、罪人の為に、人として来られた、唯一の救い主、神と人との仲保者であるという信仰告白にあります。同時に、この告白が生まれた時から、唯一の神を信じつつ、御父なる神と御子なる神との関係を問う（二神論ではない！）、三位一体論の中核となる議論も生まれました。さらには、聖霊なる神を主と告白する信仰（三神論でもない！）が、真の生ける神は、唯一の存在にして、その存在の在り方自体を「三位一体」の神として自己啓示されたのだという、「三位一体」の神への頌栄としての神学的定式化に至ります。この信仰告白の原動力には、真の救い主なる神にのみ、礼拝と賛美が帰されるべきだという救済主への頌栄がありました。この頌栄を、御父、御子、聖霊なる神に帰す信仰から、三位一体（論）が確立します。三位一体の神によって救われた喜びこそが、迫害と様々な異端との対決の中で、キリスト教会が、三位一体の神への礼拝と頌栄に導かれてきた原動力です。その意味で、古来、伝えられてきた、「祈りの法則」（「レクス・オーランディ」）が「信仰の法則」（レクス・クレデンディ）であるとの定式の所以は、まさに、三位一体論の形成過程にこそ、ふさわしく当てはまります。創造主・贖い主を知る道と人間存在の生き方を知る鍵が、「三位一体の神の存在と御業」の理解であると言っても過言ではありません。

私自身、上記のような三位一体論の形成過程の理解に至る上で、幾冊もの良書の助けをいただきました。今回は、「三位一体論」の形成過程に登場する古典と、それらを紐解く視点を紹介する書物をご紹介したいと思います。神が下さる朽ちない生命に生かされる根拠が、三位一体論の理解の内に、いかに確信に満ちて語られていたか、古代教父達の息吹に触れる道が邦訳を通して開かれていることは大きな喜びです。

1、〈古典的名著から〉

①アタナシオス、ディデュモス著「聖霊論」

三位一体論の形成過程における教理史的展開を学ぶと、必ず、登場する人物に、アタナシオス（アタナシウス）がいます。4世紀に活躍した古代教父の一人で、対アレイオス（アリウス）論争で有名になりました。アレイオスは、「御父は、御子を生んだ時に、父になった。」として、御子の被造性を語り、御父と御子の神性における本質の違いを主張した為、教会会議で異端とされた人物です。アレイオスの主張、すなわち、神性における可変性は、永遠からの神の愛による、救いの確かさを揺るがすことになります。アタナシオスは、アレイオスに対抗し、御子キリストの神性と御父の神性は、その本質と力と栄光において永遠に「同質」であることを説いた正統派です。そこに、永遠から変わることのない、御父に淵源する、御子を通しての救いと「永遠の命」の喜びが保証されると信じたからです。そして、この永遠の生命は、御父、御子と神性の力と栄光において、同等の聖霊によって信じる者に与えられます。このようなアタナシオスの三位一体の神理解を最も包括的に表現した名著として、「セラピオンへの手紙」が知られています。合わせて、彼のもとで学んだディデュモス（アレキサンドリア教理学校長）の三位一体の神理解を綴った著作が、「聖霊論」です。前者は、アタナシオスの神学全体を知る上でも非常に重要であり、後者は、4世紀に書かれた聖霊論の中で、最も優れたもの、と、双方共に、高い評価を得ています。本書では、両者の著作が一冊にまとめられ、「聖霊論」のタイトルで編集されています。

②アウグスティヌス著「三位一体論」

三位一体論の歴史的形成過程の議論に踏み込むと、「西は一（神の本性における同質）を強調し、東は三（位格間の関係の固有性）を強調する」と言われることがあります。これは、西方教会の伝統では、お一人の神の内部に、三つの位格がある、と説明する傾向があり、東方教会の伝統では、三位格が一つの神本性を共有するお一人の神として存在する、という表現を大切にする意味になるでしょう。前者の代表格は、アウグスティヌスが有名です。主著の一つ「三位一体論」が邦訳されています。三位一体の神の超越的な存在のあり方と栄光は、何人にも語り尽くせない神秘であることを認めつつ、沈黙しないために語るという、へりくだ

りを前提にして、神賛美の使命を喜びの内に、生き生きと表現しています。また、三位一体の神が愛であることの内に、愛する者、愛される者、愛という三一性を見出します。そして、神のかたちに創造された人間の人格の内にも、知と愛と精神のように、区別されつつ、分かちがたい一致が存在していると、三位一体の神の御業の痕跡を見る表現が印象的です。そこでは、三位一体の神の姿に象って造られた人間のペルソナ（人格）の内にも、三一論的な愛に生きる類比と光栄があることが認められますが、神の似像の真の現れは、永遠の存在の観想においてのみであると明言されます。つまり、神のかたちに創造された人間は、三位一体の神との交わりの内にこそ、存在の喜びを見出すことが出来るのです。

2、〈古典と教理史的展開を読み解く視点を深める為に〉

①ルーカス・フィッシャー編「神の霊 キリストの霊」

中世以降、東西教会を分けた「フィリオクェ」（原意は「子からも、また」）論争の正確な理解は、唯一の公同教会を信じる立場からは、非常に重要です。三位一体の神の存在内の「聖霊の発出」を巡って、御霊は、御父からのみ発出するとするか（東方）、御霊は、御父と御子からも発出とするか（西方）、東西教会の立場は異なります。上述の「一」の強調か、「三」の重視か、の議論ともつながります。本書では、西方教会が、御父と御子の「同一本質」を強調する故に、「子からも、また」の聖霊の発出を告白する立場をとるのに対して、東方教会は、「御霊は、御父から発出し、御霊は御子からは輝き出る。あるいは、御子により、顕現する。」（ドゥミトル・スタニロアエ）等、各々の神格間の関係性を表す上で、固有の頌栄的表現を大切にしていることが明示されます。ローマ・カトリック教会、聖公会、東方教会、プロテスタント諸派の代表的論者が、歴史的分岐点の整理と教会的一致を目指す上で、どの観点が重要なのか、を論じ合う、貴重な対話集と言えます。

②V. ロースキー著「キリスト教東方の神秘思想」

現代の東方教会の代表的神学者の一人、ロースキーにより、東方教会の三位一体論の特色が紹介されています。また、古代教会においては、三位一体の神の存在と御業の理解こそが「神学」と「敬虔」の内容であった事実を教えられます。書名の「神秘思想」は、所謂、「神秘主義」ではなく、東方の神学の伝統でいう「三位一体論」を指

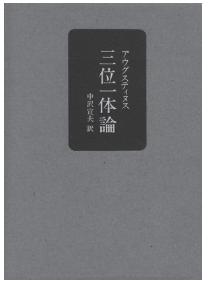
します。また、東方教会の救済論の特徴の一つ、人間の神化（テオーシス）の概念が神の栄光に与る道として示されます。これは、人の神格化ではなく、御子が、人間本性を統一し、聖霊が一人一人の個の人格を完成して成就する、三位一体の神の恩寵による救済の御業を意味します。三位一体の神との愛の交わりに招かれた人間の救済は、孤立した「個」としてではなく、教会共同体を通して、被造物全体におよぶ希望の内に実現することを、ギリシャ教父たちの深い洞察を引用しつつ、伝えてくれています。

終わりに

御父、御子、御霊なる生ける神への信仰と頌栄の軌跡を辿る思索の旅が、信仰の原点である、神から見出された喜びの再発見となれば、本当に幸いです。この喜びを見出した先達たちも、終末の日に、御父、御子、御霊なる神を賛美する光栄の完成に至る道の証言者として、断章を遺してくれています。それらの一つでも手に取り、彼らの思索を共有する手掛かりになれば、と願います。

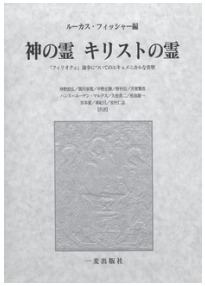
『聖霊論』

アタナシオス、ディデュモス：著
小高　毅：訳
創文社
1992 年刊
B6 判 213 頁
2,750 円



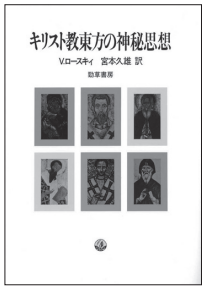
『三位一体論』

アウグスティヌス：著
中沢宣夫：訳
東京大学出版会
1975 年刊
四六判 564 頁
現在入手が難しいため図書館をご利用ください



『神の霊　キリストの霊』

ルーカス・フィッシャー：編
一麦出版社
2002 年刊
A5 判 298 頁
5,280 円



『キリスト教東方の神秘思想』

V. ロースキー：著
宮本久雄：訳
勁草書房
1995 年刊
A5 判 309 頁
3,630 円

『アウグスティヌス著作集』完結記念誌上インタビュー

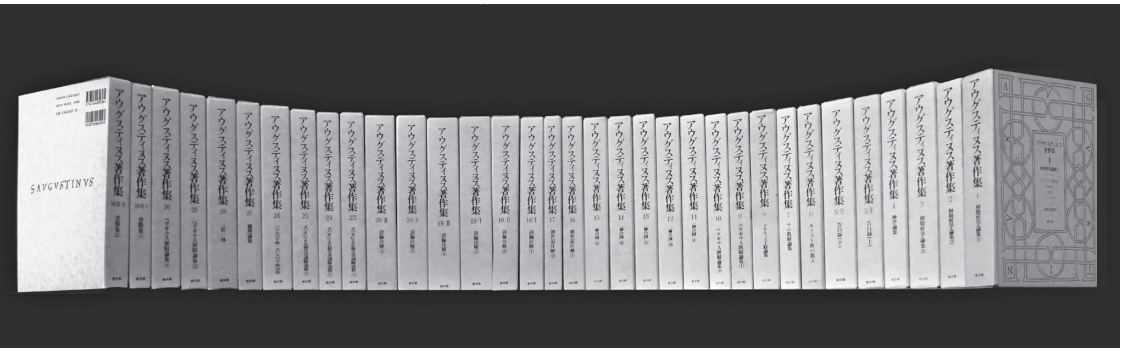
金子晴勇（かねこ・はるお　岡山大学・聖学院大学総合研究所名誉教授）

教文館から刊行してきた『アウグスティヌス著作集』（全三〇巻＋別巻二巻）が完結します。これを記念して、本著作集の編集委員の一人であり、長年アウグスティヌス研究を牽引してきた金子晴勇氏にお話をうかがいました。

――どのような経緯で本著作集の刊行が始まったのでしょうか？

一九七九年に本著作集の第一回配本がなされましたが、それより五、六年ぐらい前に教文館の出版部長であった高戸要さんに呼ばれて、東京神学大学の赤木善光さんと一緒に教文館を訪ねました。そのとき初めて『アウグスティヌス著作集』の出版という大事業の話をうかがいました。当時、創文社からトマス・アクィナスの『神学大全』が出版され始めたので、それに刺激されてアウグスティヌスの著作集の計画が始まったと思います。その頃は、残念ながらわが国ではそれまで『告白録』とその他わずかな著作しか訳されておりませんでした。そこで何を翻訳して著作集に収録するか赤木さんがはじめに立案し、それを検討しながら計画を立てたのですが、わたしたち二人だけではとても計画を実現できそうもないので、当時アウグスティヌス研究で頭角を現していた泉治典さんと茂泉昭男さんにもこの計画に参加してもらいました。宮谷宣史さんには当初から『告白録』の翻訳をお願いしました。

出版の際には責任編集者が訳文を全面的に検討することを決めました。この作業にはとても時間がかかり、苦労しました。とりわけ泉さんには『神の国』全五巻の完成に当たっていただき、実に献身的にお世話いただきました。



アウグスティヌス著作集』全30巻（別巻2巻）

ここに新進気鋭のアウグスティヌス研究者が総力をあげて世に問う著作集全一五巻（第Ⅰ期）は、翻訳・注・解説にわたって詳しい説明が施され、訳文もよく検討され、読みやすくなりました。これは何よりも優れた内容のゆえに、わが国のキリスト教思想史の中でも記念碑的業績となったと思います。

――金子先生がアウグスティヌスに魅かれて研究される理由は何ですか？

アウグスティヌスが生きた時代は古代末期であり、古き時代の思想体系がことごとく没落しようとしていた激動期にして文化の変革期でした。古代世界はその思想もろとも根底から更新されなければならなかったのです。そのときアウグスティヌスという一個の人格のうちに当代の精神的支柱であった諸思想が流入し、彼自身の生活体験を通し、かつ、歴史の厳しい試練を通して、新しい観点からキリスト教思想が形成されました。

わたしは彼の著作『神の国』にとくに興味をもちました。というのもわたしたちは、敗戦という過酷な試練に耐えるだけでなく、新しく文化国家を形成するには、何を手がかりにしたらよいのか、迷っていました。アウグスティヌスは古代末期のローマ帝国にキリスト教がどのように貢献できるかを当時の全世界に向かって提案すべく、大作『神の国』を書き始めました。それに促されて、わたしは卒業論文で彼の歴史哲学を取りあげることを決めました。当時はラテン語を学び始めたばかりなので、英訳を使いましたが、二巻で一〇〇〇頁を超える大作を読むだけでも大変に苦労しました。その後、大学院では『三位一体』で修士論文を書きました。この書は内容が込み入っていたので、ラテン語で全巻を読むのに時間がかかりましたが、時間をかけて彼の思索に一歩一歩とついていくことで、わたしも思索する訓練を受け、思

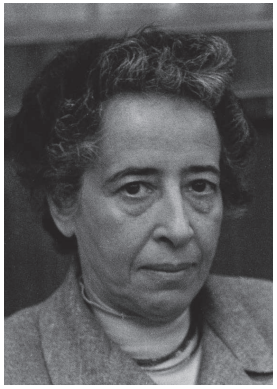
想的にも成長することができました。

――本著作集は、主に神学的著作を収めた第Ⅰ期と、説教や聖書注解を収めた第Ⅱ期に分かれています。アウグスティヌスの神学的著作は広く知られていますが、彼の説教・注解の特徴を教えてください。

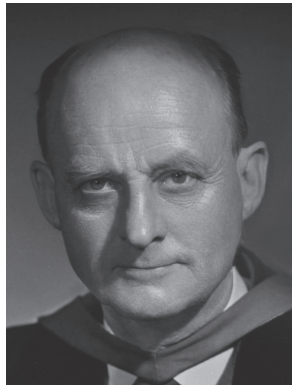
第Ⅰ期の著作集を刊行している間に読者の方々からのご要望もあって、さらに第Ⅱ期の全一五巻の著作集が刊行されることになりました。この計画はすでにその数年前からその実現に向けて翻訳に取りかかっていました。そこでまず『ヨハネによる福音書講解説教』（全三巻）の完成を待って出版計画を公表し、これに加えて他の巻も逐次刊行していくことになりました。この計画には『詩編注解』の大作を加えました。それは多くの方々の要望に基づくものでした。これらの注解は実はヨハネ福音書の講解説教と同じように、中身がすべて説教でした。詩編の場合には「民衆のための説教」と「学問的な講解」から構成されています。この詩編注解ではアウグスティヌスは民衆の中に入っていって、「兄弟たち」と絶えず呼びかけ、聖書の言葉を信徒の信仰生活に具体的に応用すべく努めました。彼は聖書の言葉を信徒の生活に近づけようとし、いつも行われる「比喩的」な解釈も荒唐無稽なものでは全くなくなり、信徒の生活に密着してなされました。比喩を聖書の本文に適用することは、アンブロシウスの影響だけでなく、『キリスト教の教え』以来、その全生涯にわたって実行されました。しかし、これまでの比喩的解釈よりも、信徒の心に直接語りかけ訴えているところに、説教者アウグスティヌスの魅力が感じられます。ヨハネ福音書の講解説教でも、また詩編の注解でも、これほど大がかりに行われた例はキリスト教史上全く見られない現象であって、この分野での研究はこれから始まることでしょう。

――アウグスティヌスの思想は現代のキリスト教にどのような点で影響を与えていると思いますか？

アウグスティヌスの思想は、現代のキリスト教の神学者の著作にはっきりとその影響が認められます。例えば、現代の気鋭の政治学者でアウグスティヌスの研究家でもあるハンナ・アレントは、アウグスティヌスのことを「記述された歴史の他のいかなる時代よりもわたしたちにある面で類似している時代に生きた偉大な思想家」と語っています。確かにわたしたちの時代との類似性は大きく、たとえば、現代の二つの世界大戦によって起こった終末意識などは彼の時代のそれと等しく、古代の終末に直面しながら形成された彼の思想は、新しい中世への出発となりました。また現代のキリスト教神学に対しても彼の思想は大きな影響を及ぼし、例えばニーバー兄弟とティリッヒに対する影響は歴然としています。兄のラインホールドは自己超越としての自己理解を、弟リチャードは彼こそ「キリストが文化の改造者である」ことを表明した古典的思想家であると主張します。さらにティリッヒは、アウグスティヌスのギリシア哲学とキリスト教とを総合する思索を高く評価し、「人間の精神が神の存在に直接近づくことができる」との主張に、信仰と文化との双方に対する揺るぎない基礎を捉えたと語っています。わが国においては、哲学者の西田幾多郎、経済学者の矢内原忠雄、教会史家の石原謙、カトリック神学者の岩下壮一と吉満義彦



ハンナ・アレント



ラインホールド・ニーバー

などによって彼の思想は受容され、現代に極めて有益であると説かれました。

さらに彼の魅力的な人柄もわれわれを惹きつけてやみません。真理探求の燃えるがごとき情熱、絶望の淵での苦悩、永遠の愛による救いなどを通して、あの豊かな内省の世界が創りだされます。そこには人間そのものの普遍的な形が描き出されています。この苦悩し病める人間が神の恩恵によって新生する劇的回心はまことに「世紀の回心」にふさわしく、その「回心の哲学」は「恩恵の博士」と呼ばれるに値する永遠の光を今日にいたるまでも放っております。

――これから初めてアウグスティヌスの著作に触れるという人にはどの作品をお薦めしますか？

彼の最良の書は『告白録』です。このことは当時の古代末期から今日に至るまで変わりません。しかし時代は絶えず変化するので、彼への関心も変わるでしょう。多面的でもある彼の思想は『神の国』や『三位一体』を構成する各巻の主題でも今日の読者には極めて魅力的に感じられるといえましょう。

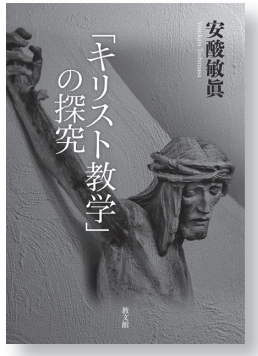
――本著作集完結の意義は何ですか？

本著作集が完成したことは、ヨーロッパの思想史を学ぶに当たって極めて重要です。翻訳がなかったときにはラテン語でいくら努力しても一日に一頁も読めなかったのに、信頼できる本著作集を使えば、極めて容易に彼の思想の全体を迅速に理解できます。こうした読書を通して初めて、偉大な文化遺産は容易に自己のものとなるでしょう。

†本・批評と紹介

神学の自己反省から生じた人文学的学問の可能性を問う

〈評者〉片柳榮一



「キリスト教学」の探究
安酸敏眞著

本書は著者が長年追究してきた「キリスト教学」に関する理念と方法についてまとめたものである。それは信仰告白的な「コミットメントの共同体に根差した研究共同体」の営みとしての神学とは区別された「どこまでも理性的な学問の規範に従う」（四五頁）ものであるという。そしてそのような方向性は、神学自体、近代の苦渋にみちた自己反省のなかで、追究しつつあるものであり、このような流れは、一九世紀後半から二〇世紀初頭のドイツ神学界にすでに登場していたという。最近でも例えばトレルチ研究の第一人者のF・W・グラーフが、トレルチに言及しつつ神学を「キリスト教の歴史的・解釈学的な文化科学」（八〇頁）と位置づけていることは、現在神学そのものの流れの方向が「キリスト教学」に近づいていると著者は考える。そしてこのことは、キリスト教的生そのものの将来についても、深い示唆を与えているように思われる。

このような神学そのもののうちから生じている自己反省を決定的に推し進めたのは、著者によればシュライアマハーであり、その課題を最も深く受け止めたのはトレルチであるという。著者によればシュライアマハーにとっては、神学の目指すところは「生き生きとしたキリスト教信仰と、あらゆる面に解放され独立独歩営まれる学問的研究との間に、永遠の契約（ein ewiger Vertrag）を締結」（三七頁）しようとすることであったという。トレルチによれば、「不断に新しい創造的総合は、絶対に対して各瞬間に可能な形姿を与えるが、しかも真の、究極的な、普遍妥当的な価値への単なる接近にすぎないとの感情をいだき続ける」（一七一頁）ものであるという。

確かにこのような試みはシュライアマハー、トレルチが考えた以上の困難を孕んでいる。周知のように、弁証法神学の旗手カール・バルトは、「信仰にとって破壊的な作用を及ぼす近代的な歴史的＝批判的方法を、神学から一掃しようと」（四〇頁）した。しかし著者は言う。「バルト神学やブルトマン神学が活況を呈した後に、再びシュライアマハーやトレルチの神学が注目を浴びているのは、いわゆる弁証法神学なるものが本質的な問題解決を与えなかったことの証左ではないでしょうか」（四一頁）。

詳細にキリスト教学の可能性について省察を加えたこの貴重な書に励まされながら、一つの問いが生まれる。確かに著者が言うようにキリスト教学は、信仰告白的な「コミットメントの共同体に根差した研究共同体」の営みではなく、「どこまでも理性的な学問の規範に従う」（四五頁）ものである。しかし人文学が持つ独特の「事柄への関与」（生への深いコミットメント）ともいうべきものがあるのではないかという問いである。殊に日本の人文学研究においては、この点が曖昧にされ、客観性という言葉を、傍観者への逃げ道にして、「関与によってのみ切り開かれる知」への熟慮が等閑にされてきたのではないか。「追体験的に再構成する」（二四八頁）ことに含まれる「自己関与」がである。「キリスト教学」における「知と信」をめぐる苦闘は、この点で、人文学への或る積極的な貢献の可能性があるように思われる。著者の人文学への深い洞察を思いながら、共に考えを深めて行ければ、と思う。

（かたやなぎ・えいいち＝京都大学名誉教授）

（A5判・二九二頁・定価五七二〇円・教文館）

神学ダイジェスト134号

急速な変化を遂げる現代社会。その中にあって、多様な価値観に直面するキリスト者。本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現代人のかかえる信仰への真摯な問いに光をあてる。

2023年6月発行
A5版112頁
定価640円（税込）

特集　神学的人間論の現在

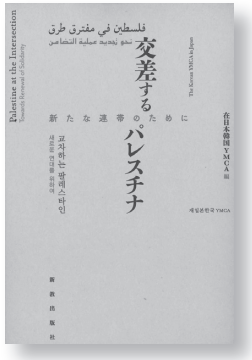
巻頭言　「神学的人間論」未完の展望　光延一郎
カトリック神学的人間論の提起　K・ラーナー
性、人種、文化―二十一世紀の神学的人間論　M・ドーク
神学的人間論の学際的課題　J・W・v・ハイスティーン
生物学に照らした神学的人間論の可能性　T・ダムズデイ
シノダリティのための知恵　J・ロジャース
〈新連載〉典礼参加へと招かれて（一）　M・サール
旧約聖書におけるトーラー　E・オットー
●連載　私は思ったより大丈夫　ホン・ソンナム

上智大学神学会
神学ダイジェスト編集委員会
東京都練馬区上石神井4-32-11
〒177-0044　Tel＆Fax(03)3594-4349
E-mail　shing-dt@netjoy.ne.jp

†本・批評と紹介

新たなパレスチナ連帯の実践的分析

〈評者〉岩城　聰



交差するパレスチナ
新たな連帯のために
在日本韓国ＹＭＣＡ編

本書は、新たなパレスチナ連帯を模索する連続ティーチインから生まれた八編の論文集である。第一章以下ではそれぞれ、フェミニズム、イスラエル占領下のロジスティクス、アメリカ黒人解放闘争、ＳＯＧＩ（性的指向および性自認）をめぐるイスラエルの政治、在日朝鮮人の闘争とパレスチナ、日本の社会運動、ジェンタイル・シオニズム、パレスチナと共闘する宗教という視点から多角的にパレスチナとの連帯について、実践的な立ち位置から出発する深い分析を伴った論文を収録している。

それらの論文に通底する問題意識は「交差性」である。全体の導入を担当している堀真悟は、ブラック・フェミニストのアンジェラ・デイヴィスの言葉を借りて、交差性とは「人種やジェンダー・セクシュアリティ、階級、国籍、能力、障害などのカテゴリーはそれぞれが独立して存在するのではなく相互に構成的な関係にあること」を示す概念であるとした上で、さらに「闘争の交差性」なるものを提示している。それぞれが直面する不正義に挑戦する複数の闘争を交差的に考え、そのようなものとして連帯を作り上げていく可能性があるのではないかという問題提起である。

現代社会は、民族、階級、宗教、ジェンダー、ＬＧＢＴＱ、レイシズム、開発経済・ロジスティクスによる搾取などの多様な課題が入り組んで存在している。一つの課題に取り組んでいる運動体が他の闘争課題を自覚的に取り込んでいくことがしばしば起こりうる。本書では、「パレスチナはフェミニストの課題である」とするパレスチナ・フェミニスト・コレクティヴ（ＰＦＣ）の例を取り上げている。また米国の大学キャンパスでは、黒人、イスラム、ユダヤ人各々に矛先が向けられてきたレイシズムへの抗議が、互いに疎外し合う関係から連帯の方へ向かう気運にあるとの指摘は重要である。在日朝鮮人の闘争の中からパレスチナの反シオニストの闘いが見えてくるのもその一例であろう。

同時に、そうした交差性の中から負の交差性ともいうべき現象が現れてくることもある。例えば、米国の主流派フェミニストの間でイスラエルを賛美する声が聞かれ、パレスチナ人フェミニストの抑圧に加担している事態がそれである。日本でも在日朝鮮人、被差別部落、沖縄、アイヌ、反原発などそれぞれの運動が連帯へと向かわず、相互の無理解と差別を生みだしている局面があることも否めない。

評者は二〇一五年、パレスチナ解放の神学センターを通じてパレスチナを訪問し、パレスチナ人クリスチャンとの交わりを深め、センターの創立者、ナイム・アティーク司祭の最近の著書を『サビールの祈り――パレスチナ解放の神学』という題名で翻訳・出版した。その関係から、特に第七章「ジェンタイル・シオニズムとパレスチナ解放神学」（役重善洋）を興味深く拝読した。役重氏は、キリスト教シオニズムをあくまでも「政治的行動」と捉え、聖書解釈や信仰のあり方に本質を求めないというロバート・スミスの議論を紹介しているが、評者は、シオニストたちによる聖書の恣意的解釈とレイシズムを容認し、さらに福音派の神学によってそれを補強する「キリスト教シオニズム」を透徹した批判の対象としなければならないと考えている。

（いわき・あきら＝日本聖公会大阪教区退職司祭）

（四六判・二〇八頁・定価二六四〇円・新教出版社）

Soli Deo Gloria

ジュニアのための キリスト教教理問答

立石章三
TATEISHI Shozo

歴史的な「教理問答」をベースに，青少年向けにわかりやすく解説したキリスト教入門書．聖書とキリスト教に対してもつ，さまざまな疑問にも答える．

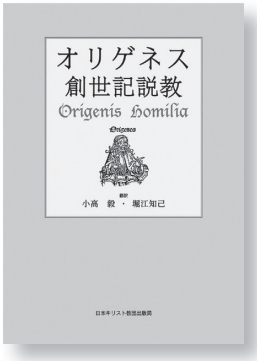
A５判・並製
定価 1320［本体 1200＋税］円
ISBN978-4-86325-149-6

株式会社　一麦出版社
札幌市南区北ノ沢３丁目 4-10
TEL（011）578-5888
http://www.ichibaku.co.jp
携帯　mobile.ichibaku.co.jp

†本・批評と紹介

旧約に啓示された神のロゴスを解き明かすオリゲネスの説教

〈評者〉富田雄治



オリゲネス 創世記説教

小高 毅、堀江知己訳

オリゲネスはニカイア以前の教会が輩出した最も優れた神学者・聖書学者であると思います。使徒たちと比較的近い時代に生き、ギリシャ思想に造詣が深く、後半生はパレスチナに拠点を移した彼の説教からは、私たちも聖書を読む上で示唆を得られるのではないでしょうか。今回、小高毅師によって刊行されていた部分訳（『中世思想原典集成1　初期ギリシャ教父』所収）を、堀江知己師が補う形で『創世記説教』が出版されたことを歓迎すると共に、ラテン語訳から翻訳をされた努力に敬意を表します。

初期キリスト教においてユダヤ教の正典でもある旧約聖書をどう受け入れ解釈すべきかは重要な神学的課題でした。オリゲネスはこの問題に対して一貫性のある解答を提示し、体系的に実践した最初の神学者であったのではないでしょうか。彼はイエス・キリストが啓示それ自体であり、旧約聖書にもキリスト（神のロゴス）が啓示されていることを解釈によって示そうとしたのだと思います。例えば創世記の中に井戸への言及があると、オリゲネスは「生ける水」（ヨハネ四・一〇）という言葉を介してキリストの福音に関連づけているようでした。そこにも彼の旧約解釈の特徴が認められるのではないでしょうか。

比喩的解釈によってキリストを明らかにしようとした理由の一つには、同時代のユダヤ教の字義的解釈の存在があったからなのでしょう。オリゲネスの解釈を評価する場合、この歴史的文脈を無視することはできないと思います。旧約の語句を比喩的に解釈し、隠されているキリストを見出す作業によってこそ、オリゲネスは神からの語りかけを聴くことができると考えたのではないでしょうか。ですから創世記説教には新約聖書からの引用が多くなされています。オリゲネスは、創世記のテキストを読みながら新約聖書の関連する箇所をいくつも思い起こしていたようでした。このような旧約の読解法は現代の説教者が準備の過程で経験することに通じる面があると思います。現代の説教者も旧約講解を行う場合、テキストからキリストの福音、或いは新約に繋がる教えを発見する時に語るべきポイントが与えられたと考えることが多いのではないでしょうか。

無論オリゲネスの解釈が全て現代に妥当する訳ではありません。例えば創世記二〇章のアビメレクは、オリゲネスによれば異邦人の哲学者を象徴し、サラは美徳（福音による生活）のシンボルであるとされます。ここにオリゲネスは、福音がまだ異邦人に伝えられる段階ではなかったという隠れた意味を掘り起こそうとするのですが、この場合のように、そこまで解釈を広げられるだろうかと思案するケースも少なくはありません。

それでもオリゲネスの旧約説教を読む意義は自ずと明らかではないでしょうか。彼は創世記の隅々にまで目を配りながら神の語りかけを聴こうとしました。『創世記説教』はその努力の成果であり、旧約聖書から使信を読み取ろうとする者にヒントを与えることができると思います。

翻訳はとても読みやすく、訳者の力量を感じさせるものがありました。小高毅師・堀江知己師によって、日本におけるオリゲネス研究がさらに深められ広げられることを期待致します。

（とみた・ゆうじ＝日本福音キリスト教連合取手キリスト教会牧師）

（A5判・二七〇頁・定価三五二〇円・日本キリスト教団出版局）

信仰の中核である三要文を
じっくり味わうシリーズ

説教黙想アレテイア叢書

三要文（さんようもん） 深読（しんどく）

十戒・主の祈り

使徒信条

◀208頁

▶216頁

各巻 A5判 並製・定価2640円

【執筆陣】朝岡　勝／荒瀬牧彦／楠原博行／小泉　健／須田 拓／高橋 誠／服部修／平野克己／広田叔弘／本城仰太／宮嵜　薫／安井 聖／吉田 隆／吉村和雄

教会の信仰の大黒柱となる使徒信条・十戒・主の祈り。この三要文のひとつひとつの言葉をじっくり味わい、深く読むシリーズ全2巻。説教者はもちろん、信徒にもぜひ読んでいただきたい。『説教黙想アレテイア』108号〜111号から書籍化。横組みとなってより読みやすくなっている。

日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 FAX 03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp《価格10%税込》
https://bp-uccj.jp

†本・批評と紹介

一方的に教え込む教育ではなく 信じて待つ非暴力の教育を

〈評者〉小林よう子

非暴力の教育
今こそ、キリスト教教育を！
小見のぞみ著

「非暴力の教育」と聞いて、子どもを殴ったり虐待のようなことをしない教育のことかと思って納得してはいけません。もちろんそんなのは「教育」とは言えないのですが、「暴力」とは決して肉体的なものだけを指すのではないのです。

「キリスト教保育」の幼稚園に関わるようになってある時、気づいたことがあります。この幼稚園で初めて働くことになった教師たちが（学校を卒業したばかりの新任か、経験者であるかを問わず）、最初につまずき悩む場面があるのです。真面目で熱心な教師であればあるほど悩むのは、自分の指示に素直に従ってくれない子どもの存在です。「さあ、お片付けをしましょう」と言うと「いや」、「今からゲームをするよ」と言っても「しない」、給食の時間になったのに「食べない」。教師はなんとかしてみんなと同じように行動してほしいと願って、説得したり、なだめすかしたり、懸命に努力します。でも、子どもは大抵、がんとして言うことを聞いてくれないのです。

子どもは彼らなりに「いや」と言う理由があります。けれども教師が聞いてくれなくて、自分の気持ちを無視してただ指示に従わせようとする。それは「暴力」なのです。

著者の小見のぞみさんは、自らの歩みを振り返りながら、長く関わってきた「キリスト教教育」を「非暴力の教育」として考えていきます。それは、教師が力をふるう教育とは異なるもうひとつの教育です。

著者が学び、影響を受けたたくさんの人たちの著作が紹介されていきます。二千年前に子どもを一人の人格として尊い価値を認め、最も小さい存在を受け入れるよう促したイエスの教えは、当時斬新すぎて理解されないまま、長い時が過ぎてしまいます。非暴力のキリスト教教育の原点となったイエスについて、聖書から深く分析したのがハンス＝リューディ・ウェーバー『イエスと子どもたち』です。

西欧社会では十七世紀になって、ようやく近代教育の必要性が考えられるようになりました。子どもは大事に保護され、教育を受ける権利があると考えられるようになってから、今度は十九世紀に「キリスト教養育」という捉え方を提示するホーレス・ブッシュネルが現れました。「教える」のではなく、愛されて育つ「今」を大事にすることを指摘します。

続いて、信仰を育てる共同体としての教会について考えるJ・H・ウェスターホフ『子どもの信仰と教会　教会教育の新しい可能性』、教育が行われる空間がどのような場であるかを考えるP・J・パーマー『教育のスピリチュアリティー　知ること・愛すること』が紹介されます。

そして、日本で初めて子どもの権利を提唱した田村直臣について。田村直臣についての研究は、著者がライフワークとして取り組んできたことでもあります。日本で子どもについてこのように考え、生涯を通して働いた人がいたことが歴史の中から掘り起こされ、知らされることは感動です。

最後に、「力」には暴力的な力であるforceと、長所や拠り所となるstrengthの二つがあることがまとめとして語られます。キリスト教教育とは、言葉でも行いでも暴力的な力を決して用いず、生きるための力を育む教育です。愛する力、平和を生み出す力、他者と共に生きる力を育てるために。

つまずいている教師に、幼稚園では「子どもが『いや』と言う時には、まずその気持ちを受け止めよう」と伝えます。そして、子どもが次に何をするか、自分で決断して動き出すことを信じて待とう、と言います。「待つ」ことには、たいへんなエネルギーがいります。でも、教師が自分の「いや」を受け入れてくれたとわかると、子どもは動き出すのです。生きる力は、こうして育っていきます。

教師が一方的に生徒に教える教育とは違う「非暴力の教育」についての理解が、この本によって広がることを願います。

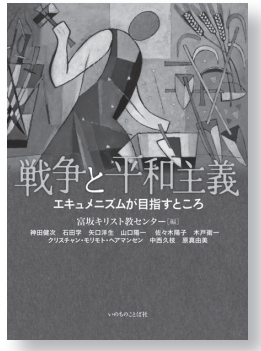
（こばやし・ようこ＝日本基督教団八戸小中野教会牧師）

（A5判・一三六頁・定価一七六〇円・日本キリスト教団出版局）

†本・批評と紹介

「キリスト教と平和」を考えるための必読書

〈評者〉西原廉太



戦争と平和主義
エキュメニズムが目指すところ
富坂キリスト教センター編

昨年二月のロシアによるウクライナに対する軍事侵攻は世界中を震撼させた。そして、現在に至るまで、世界はこの軍事的暴力を止めることができていない。

今年二月二一日、プーチン大統領は、軍事侵攻一年を記念してモスクワで行われた政治・軍事指導者向けの二時間の演説で、西側諸国の道徳的な退廃が戦争の根本原因であるとし、「彼らは歴史的事実を歪曲し、ロシアの文化、ロシア正教会といった伝統的な宗教を絶えず攻撃している」と非難した。それを象徴する出来事として、直近の英国教会での同性婚祝福を認めた総会決議を取り上げ、「聖公会は、性別にとらわれない神という考えを検討する予定だと言う。私たちにはもはや言葉がない。神よ、彼らを許し給え。彼らは自分たちが何をしているのか分からないのだ」と断罪した。聴衆の最前列にはメドベージェフ前大統領の隣に、プーチン大統領を全面的に支持するキリル総主教が座っていたが、まさしくプーチン大統領にとって、この戦争は文化・宗教戦争でもあることの証左であった。

キリスト教史、キリスト教倫理をめぐる諸問題が、国家の軍事的暴力の根拠とされるという事態に直面して、私たちの「キリスト教神学」はいかなる貢献が可能なのかが、厳しく問われている。そのような中での本書の出版が、まさに時宜にかなった貢献となることは間違いない。

第一部「キリスト教における戦争と平和主義」では、まず、石田学氏が聖書における苦難、報復、赦し、そして平和の連関性について整理する。矢口洋生氏は、アナバプティズムの視点から、平和主義の責任について提示する。神田健次氏は、WCCを中心とするエキュメニカル運動、特に「生活と実践」運動を俯瞰し、現下のウクライナ侵攻をめぐるWCCの取り組みとロシア正教会の応答等も紹介する。

第二部「太平洋戦争と平和主義」では、山口陽一氏が、神風特攻で戦死した林市造と本川譲治を取り上げ、二人の信仰と特攻の関係について考察する。佐々木陽子氏は、日本の徴兵制における徴兵忌避者に注目し、米国における良心的兵役拒否の背景にあるものを対比させながら、国家による身体の収奪としての徴兵を論じる。原真由美氏は、バプテスト派宣教師であったホルトムの神道研究が、GHQ「神道指令」の基礎となったことを明らかにしつつ、その不徹底さが日本に国家主義の残存を許したと指摘する。

第三部「現代における戦争と平和」では、木戸衛一氏が、戦後一貫して反ミリタリズムを守ってきたドイツが、湾岸戦争などを経てNATOへの軍事的参与を強化し、さらにはウクライナ軍事進攻に直面し、ドイツ平和運動の伝統的スローガンである「武器なしに平和を創る」が大きく動揺している現状を報告する。クリスチャン・モリモト・ヘアマンセン氏は、北欧における良心的兵役拒否の歴史と状況を整理した上で、ウクライナ侵攻に衝撃を受ける形で、軍備強化が一気に進もうとする中でのエキュメニズムの責任を語る。中西久枝氏は、ウクライナでの軍事衝突がハイブリッド戦争であると分析し、サイバー戦がもたらす問題に、宗教の枠組みを超えて対応することの必要性を提示する。

「キリスト教と平和」を考える上での必読書の誕生を、心から喜びたい。

（にしはら・れんた＝立教大学総長）

（A5判・二二四頁・定価二二〇〇円・いのちのことば社）

ヨベルの新刊・既刊案内

大貫隆　ナグ・ハマディ文書からヨナスまで
グノーシス研究拾遺　反響！
四六判上製・三六八頁・二七五〇円

大貫氏のこの道に至る回顧とその成果は読者に共感を呼ぶ。グノーシス主義の研究は新約聖書研究にとって不可欠・不可分の関係にあるという信念から我が国のグノーシス研究を長く牽引してきた著者が、ナグ・ハマディ文書の全体像からヨナスの『グノーシスと古代末期の精神』までをつぶさに逍遥し、その研究に散りばめられていた欠片を拾い集めた待望の書。

大貫隆　ブルトマン学派とガダマーを読む
ヨハネ福音書解釈の根本問題
四六判上製・二四〇頁・一九八〇円

復活前と現在の「地平」が「融合」するヨハネ福音書の重奏構造を解明！
ブルトマン、ケーゼマン、ボルンカムら錚々たる聖書学の権威による解釈でも見落とされてきた、イエスの全時性と共同体に吹き渡っていた聖霊の息吹への気づき。この視座から捉え直して見えてくる新たな「地平の融合」とは。

ヨベル *YOBEL Inc.* info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F
TEL03(3818)4851　FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈　（税込）

†本・批評と紹介

「カルトにならない聖書の読み方」!? にも使える愛の説教集

〈評者〉齋藤　篤

焚き火を囲んで聴く神の物語・説教篇（7）
神さまの宝もの
申命記・中
大頭眞一著

ヨベルの安田社長から、『本のひろば』への書評を依頼されたとき、真っ先に思い浮かんだのが「なぜ私に?」というものでした。そして評するのは、「焚き火牧師」と私が勝手に名付けている、大頭眞一氏の説教集シリーズの最新刊でした。

『焚き火を囲んで聴く神の物語・説教篇（7）神さまの宝もの　申命記・中』には、大頭氏が伝道牧会をされる京都のふたつの教会で取り次がれた、モーセ五書の連続説教が収録されています。説教だけではありません。校正者による解説、賛美の楽譜や歌詞、協力者たちの顔写真、しまいには前巻の書評まで掲載されているではありませんか。私のなかで「実に不思議な牧師」と映り続けていた大頭氏の気迫というものがじんじんと伝わってきます。

そして早速手に取って読んでみました。ああ、なるほど、そういうことか。なぜ私に書評依頼が来たかということがよく分かりました。本書はまさに、私が書評を書くにふさわしいかどうかは別として、レビューしたくなる一冊だったのです。

申命記というと、モーセ五書、つまり律法のなかで、もっとも「律法くさい書」だと私はとらえています。律法くさいとは具体的に、いわゆる「律法主義」に人々を引き込んで巻き込み、振り回すことができてしまうということです。「祝福か呪いか」などという究極な選択は、「救いか滅びか」「従順か不従順か」と言葉を変えながら、ついには人間が人間をゆがんだ支配の渦に巻き込んでしまうきらいすらある。律法主義とはそのような危険性を十分に含んでいると私は考えています。

私は「カルト宗教対策」をライフワークとしている者ですが、それは私の向こう側にある、社会悪をもたらす団体に向けての対策もさることながら、私たち自身がゆがんだ支配をもって他者を振り回すことのないよう、自戒を込めながら啓発することも大切な活動であると思っています。そういう意味で言えば、キリスト教の場合、いかに健全な聖書の読み方ができるかということが、とても重要なポイントになります。

大頭氏の申命記理解、おそらく聖書全体に対する理解は、呪いとか滅びとかそういうものではなく、「神の愛」がしっかりと基盤にある。それも神の愛を、さも自分自身が神になったかのように振舞うための材料にしない。人を掟で縛らない。むしろ愛の泉で包み込む神の姿を、繰り返し取り次ぎ続ける大頭氏による説教は、まさに「カルトにならない聖書の読み方」そのものであり、カルト対策本としても十分に用いることのできるものです。

私事ながら、勤務する日本基督教団東北教区センター・エマオで開講している「カルトにならない聖書の読み方」の教材として、是非大頭氏による説教集を用いたいと心から願わされた次第です。そして、その前に『焚き火を囲んで聴く神の物語』シリーズを買いそろえて読んでみたい。そんな欲求に駆られたのでした。

（さいとう・あつし＝日本基督教団仙台宮城野教会牧師、同東北教区センター・エマオ主事）

（新書判・二三二頁・定価一二一〇円・ヨベル）

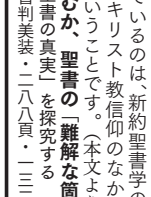
ヨベルの新刊・既刊案内

山口里子　そして拓かれる未来の道へ
マルコ福音書をジックリと読む

A5判美装・三二八頁・二七五〇円
六月末刊行予定

福音書のマルコの思いと、その基にあるイエス自身の思い・行動を、学び考える。
聖書を原語で読み、時代背景を学ぶ。古代エリート男性の父権制的な価値観が、福音書著者たちも浸み込みつつ抵抗もして編集した。現代の私たちはそれをどう読むか。この難問に、公開講座の仲間たちとともに学び、様々な人生経験と豊かな思いを分かち合う。

青野太潮　福音の中心を求めて
どう読むか、新約聖書



第4版出来！
新書判美装・二四〇頁・二二〇円

聖書学の常識は、信仰のビジョウシキ。この逆説と乖離の荒海を、いざ航海。これならいける！青野太潮の新約学。
「私が挑戦しているのは、新約聖書学の「常識」を日常のキリスト教信仰のなかに取り入れたいということです。（本文より）
既刊：**どう読むか、聖書の「難解な箇所」**
――「聖書の真実」を探究する
好評発売中　新書判美装・二八八頁・一三二〇円

ヨベル *YOBEL Inc.* info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851　FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈（税込）

†本・批評と紹介

繰り返し配置され、語り直されている好著

〈評者〉川上直哉

イエスの示す道
受難節の黙想
ヘンリ・J・M・ナウエン著
友川　榮編訳

春になりました。私たちの住む「北国」では、冬から春への劇的な変化が体感されます。その際、とりわけ、冬の終わり・春の始まりは、つらく厳しいものとなります。気圧の変動幅は大きく、持病をお持ちの方にはつらい季節です。高齢者の逝去も続き、花粉症もある。そして「3・11」も、やってきます。

その「冬の終わり・春の始まり」の時、教会暦は「レント」を迎えます。古いゲルマンの言葉で「春」を意味する言葉だそうです。レントはイースターまでの5週間と4日を数えます。その毎日を、「十字架の道行き」に沿って過ごします。――そうしたことは、知識として知られていることです。でも、「知っている」だけでなく、実際にその通り「やってみる」と、それは本当に、豊かな発見に満ちた信仰の養いとなります。肉体の弱さと悲しみの思い出の中で、慌ただしく年度が切り替わり、離別の寂しさと新しい出会いの不安に向き合う。私たちの「レント」の日々は、確かに「十字架の道行き」を辿るために、まことにふさわしい。でも、それは「レント」を実践しないと、決して分からないことでした。

『イエスの示す道』は、そうした実践のための、とてもありがたい小著です。この小著は、ヘンリ・ナウエンというオランダ出身のカトリック司祭の「アンソロジー」です。「アンソロジー」というのは、もともと「花束」を意味するそうです。ナウエン司祭が書き残した言葉たちを「花々」に見立てて、それを少しずつ集めて「花束」にしたものが、この小著です。「レント」の日々に少しずつナウエン司祭の言葉を読み、霊的に養われること。そのことを目指して「一日一章」を編んだアンソロジーが、この小著でした。

私はナウエン司祭のことをほとんど知りません。それで、この小著についてのレビューを探してみますと、すぐ、いくつかのことがわかりました。この小著は1990年にドイツ語で出版されたものでした。英語で版を重ねているようです。「もてなし（ホスピタリティ）」「祈り」「許し」「愛」というテーマが、レントの週ごとに、繰り返し配置され、語り直されている好著である、とのことでした。

なるほど、例えば、「受難週の木曜日」（今年で言えば、4月6日）の所にはこう書いてありました。

「大切なのは、従うよう招いてくださっている神の愛の呼びかけに、いつも耳をすませていること、すなわち、心を集中して聴くことなのです…具体的には、教会の典礼行事に参加するということです。待降（降臨）節、クリスマス、受難（大斎、四旬）節、イースター、昇天日、聖霊降臨節など、これらの期間や祝祭日は、イエスをもっとよく知り、教会において主から賜っている聖なる命とますます密接に結ばれることを、人々に教えているものです」。

何気なく・あっという間に過ぎる日々の移ろいに、神様の声を聞く。御言葉の響きを聴き取る。そうして、日常は祈りの場となる。この小著の中で、聖句への黙想はしばしば、そのまま祈りとなって行きます。

「日本の教会は、勉強するばかりだ」と、最近も、ある方に叱られました。確かに、そうかもしれません。ナウエンさんの言葉に沿って、祈りへと励もう。祈りの中でイエスと結ばれ、良い実りを賜ろう――そう思いながら、この小著と共に、今年のレントを過ごし、祝された私でした。

（かわかみ・なおや＝日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師）

（四六判・二二四頁・定価一八七〇円・ヨベル）

村椿嘉信著　＊絶賛発売中
荒れ地に咲く花
生きること愛すること

混沌とした時代にあって、社会のさまざまな問題と関わりながら、どのように生きるべきなのか。イエスは「愛すること」が決定的に重要だと指摘した。

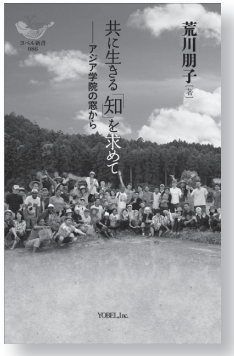
四六判・160頁
定価 1,320円
ISBN978-4-909871-43-5

ヨベル　YOBEL Inc.
お問い合せ：info@yobel.co.jp
情報：http://www.yobel.co.jp

†本・批評と紹介

農業実習すると、英語と世界史の偏差値が15ポイントずつ、上がる学院

〈評者〉色平哲郎



共に生きる「知」を求めて
アジア学院の窓から
荒川朋子著

朋子さん！

今年２０２３年は朋子さんが校長を務めるアジア学院創立50周年ですね。誠におめでとうございます。そして、貴著〈共に生きる「知」を求めて〉の出版、うれしいことです。一読、すばらしい。周囲の高校生や医学生、看護学生に勧めたいと存じます。

私たちが家族で学院を訪ねたのは30年ほど前のこと。西那須野駅から歩いて参りましたことを覚えております。高見敏弘先生がお元気でした。

高校生や（医学部）浪人生向けに講演する際など、学院での農業実習を勧めるようにしております。「実利的に申し上げれば、英語と世界史の偏差値が15ポイントずつ、上がります」などと申し上げるのは、学院理念に照したなら、通俗的にすぎることでしょうか。

ですが、実際に、学院の皆さんと一緒に農作業で汗を流し、食卓を囲んだ経験のある生徒さん、学生さんからは「おもしろかった」「たのしかった」「いのちをいただいているんだ、ということを自覚させていただいた」といった感想が寄せられます。

こういった現場体験とともに、文字通り世界中の若者と英語で語りあうことを通じ、世界の、地球上の現状や闇を理解しつつ、しかも英語と世界史の偏差値が上がるのであれば、それはそれですばらしいことでありましょう。「東京のＩＣＵ（国際基督教大学）のリベラル・アーツが体験できる場なんだよ」と申し上げております。

学院の先駆性は「ともに生きる」という理念を、理屈を超え、日々実践されている点にありましょう。

私の勤務する佐久総合病院は、別名「サケ騒動病院」と呼ばれるほど、（地域住民としての）農民たちとの交流を大事にしております。現在は「病院の形」をとってはおりますが、78年前、敗戦直後の設立時には「ユニオン」であって、「農民とともに」をモットーに、この間、地域に根ざした保健医療福祉介護の実践に取り組んで参りました。

だいぶ以前から貴アジア学院と交流をもちたいものだと考えておりました。そして念願かなって、当院の研修医たちに通ってもらうことが叶いました。学院での農業研修後、彼らはフィリピンのレイテ島を訪問し、短期間ですが保健実習をしています。

医師（石）頭になりがちな臨床医に、若いうちにこそ「世界」と「世間」を知っていただき、「広い視野」と「低い視点」を大事にした診療を続けていただきたいと願うからです。

プライマリー・ヘルス・ケアということばがあります。住民が医療機関のオーナーシップを保ちながら、プロフェッションたる技術者と「ともに」地域づくりにとりくむという発想で、１９７８年のアルマアタ宣言に体現されています。

プライマリー・ケアということばと似ていますが、「方向性」が真逆となります。ＰＨＣでは住民が主体で、技術者とともにとりくむ。ＰＣでは医療技術者が主体で、住民は客体です。

学院での日々の実践から、この地球の矛盾や悲しみ、驚きや喜びを英語で共有できる、弱い人、貧しい人、苦しんでいる人、小さくされている人へのケアに関心をもつ、そんな若者たちが育っていくことを期待します。

ホモ・サピエンスというより、ホモ・クーランスとよばれる人間観を体現した各国の若者たちに、今後の「地球の健康」（プラネタリー・ヘルス）が託されることを期待しております。

「ちがい」と「まちがい」を尊重できる、そんな寛容な貴学院の「創立１００周年式典」に、２０７３年、ぜひ参加させてくださいネ。

（いろひら・てつろう＝ＪＡ長野厚生連佐久総合病院内科医師）

（新書判・二四〇頁・一三二〇円・ヨベル）

信仰告白の構造が見える画期的な分析

〈評者〉**相馬伸郎**

〈ウェストミンスター信仰告白〉歴史的・分析的註解
松谷好明著

「キリスト教ってなんだ?」と混乱させられる時代の中でウェストミンスター信仰告白は「これだ!」と答えてきました。16世紀の改革者たちの諸信仰告白を受け継ぎ、展開させたまさにプロテスタントの総決算的文書、教会史の金字塔の一つであることは疑うことができません。神学的流行や新しい聖書解釈がもてはやされがちな日本の状況において教会形成と伝道の足元を見つめ直すための指導者必携文書であると思います。

それだけに、この註解や講解を公にすることのできる文献学研究、歴史研究、教理研究の力量を持つ牧師や研究者は決して多くありません。ひとり松谷好明先生は、生涯をかけこれに取り組まれついに世界レベルに達した稀有な研究者です。このたび、改革派陣営の大きな期待を背に、満を持して上梓されました。

さて残念ながら、日本においてウェストミンスター信仰告白は敬して遠ざけられてきたのは事実だろうと思われます。誰よりも筆者自身、かつて改革教会の伝統の外にいて、いのちが燃えるような聖書の救いの教えを理路整然かつ厳密に書き連ねるウェストミンスター信仰告白や同大教理問答に「福音を冷ましてしまう」とほとんど生理的な拒否反応さえ覚えていた時代がありました。しかし、そもそもウェストミンスター信仰規準は、神学者たちの長期にわたる会議によって編まれた公文書中の公文書です。個性的な表現や神学主張は退けられて当然です。また信仰告白は一義的には、教理の擁護に責任を担う職務者たちのためのものですから難解な箇所があるのも当然です。

だからこそ本書の価値は際立つものとなります。難解な箇所は、牧者ならではと思われますが、引証聖句をして丁寧に解きほぐされていきます。著者は、既に『三訂版ウェストミンスター信仰規準』（一麦出版社、２０２１年）をペトルス・ラムスのディコトミー（二分法・各概念の二分を繰り返す）に基づいて訳出されました。本書もまたラムスの二分法によって分析し、その構造を可視化してみせ、一目瞭然に提示することに成功しています。著者の「各章、各節が、徹頭徹尾、ラムス的二分法で貫かれている」（44頁）との分析、解釈の正しさは見事に証明されています。「何度読んでも意味不明」と嘆かれた方にこそ手にして「見て」いただければと思います。著者の頭脳の明晰さは、附録のA～Lの図表にも現れています。例えば、Lのジェームズ・アッシャー「神学体系」の構造図だけでも購入の元がとれるかもしれません。

しかも、本体となる註解は、その構造理解に支えられてどこまでも冷静かつ短文による明晰さが特徴です。例えば、歴史研究に裏打ちされた解説に「なるほどこの一句は外せないわけだ」と論争相手に対する言葉の意図が鮮明にされます。何よりも会議そのものへの尊敬と議論し抜かれた言葉と事柄に対する喜びと感謝によって、味わい深くついには熱いものとなっています。著者自身が、本告白の「火種」に半世紀燃やされ続けてこられたからだと思われます。おそらく本書によってウェストミンスター信仰告白に開眼される学徒が起こされるでありましょう。願わくは、この火がさらに燃やされんことを。

新たな戦争前夜を思わされる今、著者の『キリスト者への問い――あなたは天皇をだれと言うか』（一麦出版社、２０１８年）ではありませんが、日本の教会はまたもかつての過ちを違った仕方で露呈していると思われます。背骨と腰が脆弱だからです。キリストの権威への徹底的服従を貫徹し、偶像礼拝に抵抗するためには、急がば回れではありませんが、カテキズム教育＝教理の体得という一本道を愚直に歩むことこそ本道かつ急務ではないでしょうか。本書は、この時代の教界に対する神からの問いかけであり賜物であると思います。著者に心から感謝するとともに生涯の研究を豊かに実らせてくださった神の栄光をたたえる者です。

（そうま・のぶお＝日本キリスト改革派教会名古屋岩の上教会牧師）

（菊判・五七〇頁・附録図表六点・定価一一〇〇〇円・一麦出版社）

†本・批評と紹介

国際主義者としての歩みの原点

〈評者〉吉田 亮

湯浅八郎の留学経験
アメリカにおけるキリスト教国際主義との出会いとその影響
辻 直人著

本書は留学というヒトの国際移動を組み込んだキリスト教教育史である。近代日本海外留学史研究の実績を持つ著者は、本書で「私費留学」生の事例として湯浅八郎を扱っている。湯浅は戦間戦後期日本キリスト教教育史を代表する指導者のひとりで、同志社大学総長及び国際基督教大学学長、新島学園園長、キリスト教学校教育同盟理事長他を歴任しており、米国留学（一九〇八―二一年）及び米国招請（一九三九―四六年）で長期の米国生活を送っている。

本書は湯浅の生涯を時系列に分割して論じる。一章では湯浅の家庭及び就学の両環境を取り上げ、特にクリスチャン家族が人間形成に及ぼした影響を強調する。二―三章は湯浅の留学体験を論じる。先ず、同時期米国の日本人留学生による学生会活動を概観した上で（二章）、湯浅による大学・大学院留学期間中でも、イリノイ大学ＹＭＣＡでの活動やそれに付随する経験が彼の信仰や国際感覚に及ぼした決定的な影響を、同大学所蔵史料を使って論じる（三章）。四章では帰国後ファシズム下にあって、同志社総長職として苦悩しながらも基督教教育同盟会をはじめとする日本社会全体に発した諸活動に、留学時で培ったキリスト教信仰や国際感覚の影響があると指摘する。五章では同志社総長辞任後の滞米時、会衆派やアメリカン・ボードの進めていたエキュメニカル運動に協力することで、総長時代の体験を総括し、キリスト教国際主義への展望を確信したとする。六章では戦後において日本のキリスト教教育諸機関の牽引者として見せたキリスト教教育観に、戦前戦中期に構築したキリスト教国際主義観が反映されていたと論じる。終章は本書全体の総括であり、中西部の大学への進学、ＹＭＣＡの国際エキュメニカル運動への関与、米国留学、国際的視野をもつ自由主義教育を湯浅による留学体験のポイントとして挙げる。さらに米国留学からの影響はあったものの、湯浅はアメリカをロールモデルとしなかったことも著者は指摘している。

米国プロテスタント史において、「プロテスタント・インターナショナル」（ＰＩ）の活動は一九世紀末を嚆矢とし、戦前期においては主としてＹＭＣＡ、ＹＷＣＡ、米国キリスト教会協議会（ＦＣＣＣＡ）や北米外国伝道会議（ＦＭＣＮＡ）、そしてグラス・コミッション他によって展開されたことは研究されている。湯浅の場合、留学中にモット率いるＹＭＣＡに関与したこと、戦時下にＦＭＣＮＡのメンバーやダラスと接点があったことは『あるリベラリストの回想』で明らかにされているが、その体験の実態とその意味は解明されてこなかった。本書の最大の功績は、湯浅による米国「留学」経験の実相をＹＭＣＡ資料を用いて掘り下げ、帰国後の活動と関係させることによって、日米キリスト教越境史研究の一端を担ったところにある。今後、ＰＩに関する研究と繋ぎながら、ＹＭＣＡ以外の史料も調査した研究に進化することが期待される。

湯浅のように、留学や招請によって受入国のキリスト教史と関係をもつことで、複数国家に分断されたキリスト教史を越境して関係史を構築する役割を担ったエージェントは他にもいる。本書や他書が示す米国の日本人留学生だけでなく、一九世紀末から二〇世紀前半期にかけて、海外には多種の目的をもつ日本人が滞在しており、彼（女）等がどのようなクリスチャン「架け橋」エージェントとなっていったのか、研究が今後さらに展開拡大することを期待したい。

（よしだ・りょう＝同志社大学教授）

（Ａ５判・二三八頁・定価四〇七〇円・教文館）

聖書の言葉で日本語が変わる

〈評者〉 **加藤常昭**

聖書語から日本語へ
鈴木範久著

大きい書物ではないが面白い本である。表題にある「聖書語」というのは、著者の造語である。一般に受け入れられるようになるであろう日本で最初の聖書翻訳が刊行されて以来初めて日本語として知られるようになった言葉のことである。それまでに既に日本語にあったが聖書翻訳に用いられて以来、意味が変わってしまった大切な言葉もある。例えば「神」、「愛」などである。それらについては、すでに著者の論考もある。ここではそれと違って初めて聖書翻訳に用いられた言葉のことである。著者が繰り返し語ることであるが、日本におけるキリスト者の数は、殆ど無視されてしまうほど少数であるが、聖書の売れ行きは隠れたベストセラーと言われるほどよく売れるそうである。そのため聖書で用いられる言葉はキリスト教会の限定された専門用語にとどまらず、教会外でも広く用いられるようになる。必然的にそこで語られる事柄も教会外で用いられるようになる。つまり文学者や思想者の中で広く用いられるようになる。生まれたところは聖書であることなど忘れられる程に一般化する。このような文化現象は大変興味あるものであるが、それほど文化研究者の関心を惹くことではない。

著者はすでに九〇歳の方であるが、長く立教大学で教鞭をとり、かたわら例えば内村鑑三の研究などと共にまさにこのような領域、つまり聖書翻訳の成り立ちやその言葉の読まれ方についても既に業績のある方である。その方がその蘊蓄を傾けて生み出したこの書物はとてもおもしろい。日本文化の営みに関心を持つ一般の方々にとっても面白い書物であるとともに日本伝道の責任を負う我々にとっても必読の書物である。例えば説教者にとっても必読の書であると考える。ただ一読するだけではなく、常時傍において何度も繰り返して読むと良いであろう。

本をひらいてみよう。前書きに続いて本文に入る。辞典のように聖書語が列挙される。

そこには「教会」、「洗礼」などのように当然と思われる聖書語もあるが、「パン」「兄弟」などのようにへぇと思われるような一般的と思われる用語もある。単語ではなく「一粒の麦」などのような、文字というよりもフレーズの類もいくつもある。ほぼ一〇〇例である。例えばパンの項目を開いてみよう。主イエスが語られた「人はパンのみで生きるのではない」との御言葉の翻訳などで初めて用いられた。それ以前の聖書の翻訳では「餅」の言葉で翻訳されたらしい。明治の時代になってはじめて日本人はこの用語に出会ったらしい。そこで著者は何人もの人々がその作文の中でこの「パン」という用語を用いている。例えば徳富蘆花に始まり漱石その他に及ぶ最後は加藤周一の『羊の歌』にまで及ぶ。あるいは「隣」の一項である。主イエスは隣人を愛するようにと言われた御言葉は、多くの人々の心を動かすこととなった。隣人愛という事柄が日本人の心を突き動かしたのである。そのことがここにおける西田哲学をはじめ太宰文学の核心にまで触れることになったことを数多くの引用から知ることができる。

右の例から分かるように著者が引用する文献は広く各領域に及ぶ。日頃著者がどれだけ多くの文献に触れているか驚嘆に値する。それだけでも読んでいて楽しいし、こちらまで豊かにされる。私が思うに、今は日本文化とのこのような対話をする人が少なくなっている。日本の教会の為にも、教会外の世界にとっても残念なことであると思う。この書物が火付け役となってこうした日本文化と教会との関わりの関心が新しく向けられ、対話が進み研究が深められることを願う。面白い経験をさせて頂き、著者に感謝する。

（かとう・つねあき＝神学者・説教塾主宰）

（四六判・三〇二頁・定価三三〇〇円・教文館）

■教文館

わたしの神学六十年

近藤勝彦著

神学的自伝「わたしの神学六十年」と、主著『キリスト教教義学』をめぐって語った講演と論文も収録。著者の神学的主張を理解するための最良の手引き。

四六判・220頁・価格未定

日本正教史
――幕末から現代まで

及川　信、伊藤慶郎、ハリン・イリヤ、小野貞治著
及川　信監修

宣教師ニコライが函館に渡来して始まった日本正教会。幾多の苦難を乗り越えた160年あまりの歴史を、最新の一次資料をもとに描いた画期的労作。

A5判・450頁・定価5500円

■新教出版社

内村鑑三 闘いの軌跡

関口安義著

内村鑑三の激動の生涯を実証的な調査に徹して描き切った評伝大作。著者は芥川龍之介研究から出発し、芥川人脈に連なる多くの知識人の評伝をものしてきた。本書は二〇一九年に上梓した『評伝矢内原忠雄』に次ぐ著者のライフワークであり、遺作となった。

A5判・600頁・予価8000円

カール・バルト《教会教義学》の世界

寺園喜基著

バルトの主著《教会教義学》は二〇世紀神学における最も重要な貢献の一つだが、邦訳で三六巻に及ぶ膨大で複雑な内容は、通読はおろか全容を見通すことも困難である。本書は、生涯《教会教義学》に取り組んできた著者が一般読者のために試みた平易な道案内であり、バルト神学への無二の入門書ともなっている。

四六判・350頁・予価3500円

■日本キリスト教団出版局

わたしが「カルト」に？
――ゆがんだ支配はすぐそばに

齋藤篤、竹迫之著
川島堅二監修

誰もがカルト被害にあう可能性があり、誰もがカルト化する可能性もある。カルト脱会者の牧師による、カルトの現状、基礎知識、被害防止策を網羅した1冊。

四六判・136頁・定価1650円

今日と明日をつなぐもの
――SDGsと聖書のメッセージ

青山学院宗教主任会編著

青山学院グローバルウィークで語られたメッセージを中心に、キリスト者としてSDGsをどうとらえ、今をどう生きるかを示す。神の国こそ、究極のSDGsだ！

四六判・128頁・定価1430円

カール・バルト入門
――21世紀に和解を語る神学

上田光正著

人間の理性で構築した自由主義神学と決別し、「神が語った」という圧倒的な事実を神学の土台に据えたバルト神学の、今日的な意味を確認する。

A5判・176頁（予定）・予価2200円

遠藤周作探究I
――遠藤周作　その人生と『沈黙』の真実

山根道公著

『沈黙』執筆に至る経緯や各登場人物の魂のドラマをたどりつつ、『沈黙』の真実を解き明かす。遠藤周作の年譜付き。遠藤周作生誕100年を記念し、改訂復刊。

A5判・400頁（予定）・定価4400円

シンボルで味わう典礼・礼拝（仮）

宮越俊光著

典礼・礼拝で用いられる所作、司式者の服装、儀礼用具、色や数字など、さまざまなシンボルの由来と歴史をたどり、そこに込められた豊かな意味を味わう。

A5判・256頁（予定）・予価3080円

INFORMATION
近刊情報

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西６丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrinkan_syoten_0530@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区錦町1-136 東北教区センター・エマオ庵	022-223-2736	共用		fqcwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新宿2-8-2 千葉クリスチャンセンタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@yesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
待晨堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimdo.com/	taishindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1日本販売(外販専門)	03-3260-5663	03-3260-5637		tokyo@nikkihan.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.7.biglobe.ne.jp/~yokohamacbs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunsha.la.coocan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://webkyoto-inet.or.jp/people/ktjordan/	ktjordan@mbox.kyoto-inet.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkihan.co.jp	00170-2-421390
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古庄大道ノ西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwbt3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/matsuyama_1007/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上富野5-2-18	093-967-0321	共用		kcbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleluya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花４丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacbs.net	info@okinawacbs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は　日キ販営業部　℡ 03-3260-5670 にご連絡ください。

全国のキリスト教書店員が選んだいちばん読んでほしい本

主催 キリスト教出版販売協会

キリスト教書店大賞2023

Christian Bookshop Awards 2023

2022年1月～12月に出版された
キリスト教書の中から全国の
キリスト教書店員が大賞を選出します。

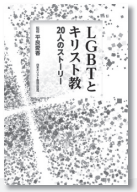
ノミネート11作品

〈タイトル50音順〉

価格は10%税込

「いいね!」をクリックして
最新情報をGET!
QRコードで簡単アクセス!➡

LGBTとキリスト教
20人のストーリー



平良愛香 監修

定価2,200円

日本キリスト教団出版局

オススメ!

清光書店 **飯尾千尋さん**

LGBTについて学ぼうと思い拝読しました。LGBTにフォーカスされてはいますが、20人、あるいは、それ以上の方たちの力強い信仰の証し集と感じました。マイノリティ、マジョリティというボーダーではなくて、キリスト者として他者と共に歩むには……を考えるきっかけになる一冊だと思います。

使徒信条 光の武具を身に着けて

平野克己 著

定価1,430円

日本キリスト教団出版局

オススメ!

東京キリスト教書店 **若林弘通さん**

とてもわかりやすく、使徒信条を解読しています。読書会にも最適です。

何を信じて生きるのか

片柳弘史 著

定価1,430円

PHP 研究所

オススメ!

教文館キリスト教書部 **秋月美映子さん**

ある若者が神父様と出会った事で、自分が抱えていた悩みや疑問を問いかける。この若者は、あたかも私自身の胸の内を代弁してくれているかのように感じた。とても興味深く勉強になった一冊です。

日々を生きる力
あなたを励ます聖書の言葉366

片柳弘史 著

定価990円

教文館

オススメ!

北九州キリスト教ブックセンター **原口悦子さん**

ハンディ! 安価!わかり易い! これだけのボリュームの内容で、1000円以下の価格です。旧約聖書続編に親しみのないプロテスタントの信者にとって、続編の聖句が新鮮に響きます!

たどりつくまで
ロバと三人の旅

アン・ブース 文

サム・アッシャー 絵

真下弥生 訳

定価1,650円

新教出版社

オススメ!

善隣館書店 **浜田陽子さん**

やわらかな絵、わずかな色彩ですが、希望を感じさせる黄色の色遣いが印象的です。真下先生の解説がすばらしく、イエス様の降誕のあとの逃避行が、現代にあって、安住の地を求めてさまよう多くの人々の姿に重なりました。読む人に希望を与える一冊だと思いました。

21世紀のキリスト教入門
一つの教会の豊かな信仰

フスト・ゴンサレス 著

神代真砂実／髙野佳男 訳

定価2,200円

教文館

オススメ!

沖縄キリスト教書店 **川上直美さん**

信仰が揺さぶられる時代。私たちの信仰告白を確かなものにするためにも読んでおきたい一冊です。教会での学び、個人の学びのための必読書!!

八木重吉 家族を詩う
日本キリスト教団出版局 編

定価1,320円

日本キリスト教団出版局

オススメ!

ライフセンター新潟書店 **永井美智代さん**

愛する家族を残し、30歳の若さで召された八木重吉。地上での生涯は短くても、形見として残された詩は、約100年後に生きる私たちにも、信仰とは、いのちとは、家族とは、一途な一言一言を問いかけます。詩の背景や資料も記されているので、重吉の詩にはじめて触れる若い人にも、ぜひ手にとって欲しい一冊です。

老いと祝福
石丸昌彦 著

定価2,420円

日本キリスト教団出版局

オススメ!

名古屋聖文舎 **伊奈均志さん**

病と老いはだれでも不可避です。ポジティブに生きる指針に感銘。

どう読むか、聖書の「難解な箇所」
「聖書の真実」を探究する

青野太潮 著

定価1,320円

ヨベル

オススメ!

待晨堂 **市川義生さん**

教会生活の中であたりまえと受けとめていた聖書理解を、改めて考えさせられる書籍。手ごろな新書版だが内容は深く、読書会等のテキストとして使用してもらいたい。

ビジュアル版 はじめての聖書物語

サリー・タグホルム／アンドレア・シルズ 著

フリアン・デ・ナルバエス イラスト

山崎正浩 訳

定価3,520円

創元社

オススメ!

横浜キリスト教書店 **高橋友彦さん**

はじめて聖書を読む子ども達、そして大人にも、美しいイラスト、図版、写真にあふれた各頁を楽しく読んでいただけます。ベテランの信者にとっては、巻末の旧約、新約聖書の登場人物と語句の索引などが聖書の学びに重宝します。しっかりした装丁、リーズナブルな価格で、CSの教材やプレゼントにお奨めです。

ヤバい神
不都合な記事による旧約聖書入門

トーマス・レーマー 著

白田浩一 訳

定価2,420円

新教出版社

オススメ!

大阪キリスト教書店 **美田嘉信さん**

旧約聖書を解釈するために、私達は頭を悩ませます。この本は、深い信仰をもった著者により、敬遠しがちな旧約聖書に目を向けさせてくれます。

キリスト教書店大賞フェイスブックページ　https://www.facebook.com/christianbookoftheyear/

福音と世界

2023年7月号

特集　破局と希望

寄稿者＝堀江宗正、左近豊、出口剛司、光延一郎、菊地了、福嶋揚

新連載　八木重吉の聖書（今高義也）／**好評連載**　私は告白する、私の神を（長尾優）、地域から考える在日朝鮮人史と教会史（金耿昊）、グレート小林と三人の女（飯田華子）、神と「女性的なるもの」を辿って（後藤里菜）、古代イスラエル文学史序説（勝村弘也）ほか

A5判・定価660円・〒70円
定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社　TEL：03-3260-6148
Email: sales@shinkyo-pb.com

編集室から

今月号及び先月号の最終ページの前に「キリスト教書店大賞２０２３」のご案内をお載せしていますがご覧になっていただいているでしょうか。前年に出版されたキリスト教書の中から、全国のキリスト教書店の店員がお薦めの本に投票して大賞を選ぶもので、今年で第13回になります。現在は一次投票を経てノミネート11作品が選ばれたところで、夏までの二次投票で大賞が決まります。

私もかつてキリスト教書店に勤務していたころ投票に参加していましたが、内輪では投票内容が公開されるため、他の書店員の方が選んだ書籍を知ることもできて興味深いものでした。ただ前年に刊行された書籍が投票対象ということで、書店員にとって印象に残っているものほど票が集まりやすく、それはえてして「よく売れた本」になりがちではあります。また、遅く出版されたものほど記憶に新しいため有利であったりということも…。

そうは言っても、ノミネート作品は本誌で取り上げられたものが殆どで（全部ではないのが少々口惜しくありますが）、いずれも自信をもってお薦めできる良書です。本誌読者の皆さまには既にお読みになられたものも多く含まれているかもしれません。ノミネート作品をご覧になり、未読のものを探す、あるいは既読のものを改めて開いてみるなどして大賞作品を予想するのはいかがでしょう？

大賞の発表は8月です。どの作品が受賞するのか、どうぞお楽しみに！　なお、過去の受賞歴などはフェイスブック https://www.facebook.com/christianbookoftheyear でご覧になれます。こちらも是非ご覧ください。　（村上）

予告

本のひろば

2023年8月号

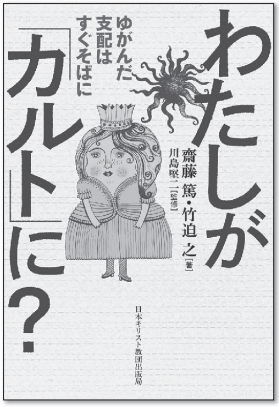
本・批評と紹介

（巻頭エッセイ）田中光、（書評）住谷翠著『雅歌の説教』、木原活信著『ジョージ・ミュラーとキリスト教社会福祉の源泉』、小友聡著『コヘレトと黙示思想』、N・T・ライト著『すべての人のためのマタイ福音書2』、湯浅八郎著『民芸の心〔新装和英版〕』、堀江洋文著『ハインリヒ・ブリンガー』、鬼頭葉子著『動物という隣人』、及川信著『イースター小品集　わたしが十字架になります』他

日本キリスト教団出版局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 TEL03-3204-0422 FAX03-3204-0457
e-mail eigyou@bp.uccj.or.jp ホームページ https://bp-uccj.jp《価格10%税込》

わたしが「カルト」に?
ゆがんだ支配はすぐそばに

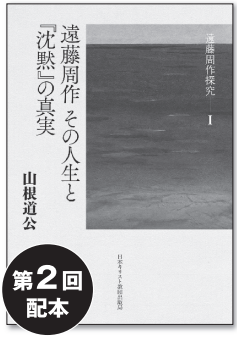
2023年6月23日刊行予定



齋藤 篤／竹迫 之　川島堅二 監修

カルト脱会者で、現在はカルト被害者支援に携わる２名の牧師がカルト問題の現状、カルトの基礎知識、被害防止の対策などを丁寧に指南。誰もがカルト化する可能性があることを知ることが、カルトへの最大の防御になると訴える。 **◆四六判 並製・136頁・定価1,650円**

本書を推薦します
鈴木エイト（ジャーナリスト・作家）



第2回配本

遠藤周作探究
I 遠藤周作 その人生と『沈黙』の真実

2023年6月23日刊行予定

山根道公

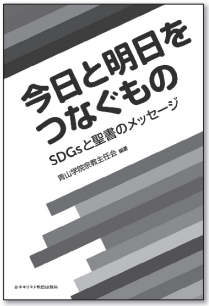
『沈黙』執筆に至る経緯、本来の書名「日向の匂い」に遠藤がこめた想い、各登場人物の魂のドラマを読み解き、『沈黙』という作品の真実を解き明かす。遠藤周作生誕100年を記念して改訂復刊。 **◆A5判 上製・400頁・定価4,840円**

シリーズ刊行案内
- II 遠藤周作『深い河』を読む　マザー・テレサ、宮沢賢治と響きあう世界　定価3,520円
- III 遠藤周作の文学とキリスト教（仮題）　2024年2月予定

今日と明日をつなぐもの
SDGsと聖書のメッセージ

青山学院宗教主任会 編著

2023年6月23日刊行予定



青山学院のSDGs（持続可能な開発目標）への取り組みであるグローバルウィークで語られた、聖書と今をつなぐメッセージ集。神がつくられた世界で生きるために本当に必要なこととは。

◆四六判 並製・128頁・定価1,430円

本のひろば　第七八七号　二〇二三年七月号
一九五七年七月一七日　第三種郵便物認可
二〇二三年七月一日発行（毎月一回一日発行）

6月の新刊（価格表示は税込）

コリントの信徒への手紙二講解 上
1―5章
袴田康裕 著

神は、あらゆる苦難に際して わたしたちを慰めてくださる！

こころに響く珠玉の言葉が散りばめられていながら、緒論問題の複雑さから講解説教をすることが難しい『コリントの信徒への手紙二』。穏健な立場に立ちながら、この手紙の魅力を存分に説き明かした講解説教集。全2巻で刊行。

● 四六判・並製・260頁・定価2,860円

チョコレートのイギリス史
企業フィランソロピーの源流
山本 通 著

「キットカット」を生み出したラウントリー社、「デアリー・ミルク」を生み出したキャドバリー社は、菓子の生産を通して慈善事業と企業内福祉を展開した。博愛主義を掲げる友会徒（クェイカー）が創業し、「世のため、人のため」の経営理念を実現した両社の歴史を時代背景と共に辿る。

● 四六判・並製・220頁・定価2,970円

ウイリアムス神学館叢書Ⅵ
今さら聞けない!? キリスト教
古典としての新約聖書編
前川 裕 著

今さら聞けない素朴な疑問を手がかりに、成り立ち、書物の形態、写本によって異なる本文の比較と翻訳など、信仰の書、人類の古典としてどのように新約聖書研究が進んできたかを紹介する。

● A5判・並製・270頁・定価2,200円

『ウイリアムス神学館叢書』既刊、好評発売中！
今さら聞けない!? キリスト教

Ⅰ 礼拝・祈祷書編　吉田雅人 著
● A5判・並製・334頁・定価2,200円

Ⅱ 聖書・聖書朗読・説教編　黒田 裕 著
● A5判・並製・210頁・定価1,650円

Ⅲ キリスト教史編　菊地伸二 著
● A5判・並製・194頁・定価1,430円

Ⅳ 旧約聖書編　勝村弘也 著
● A5判・並製・228頁・定価1,870円

Ⅴ 聖公会の歴史と教理編　岩城 聰 著
● A5判・並製・240頁・定価1,980円

ついに完結！
唯一無二の著作集

アウグスティヌス著作集 第20巻Ⅱ
詩編注解(6)
アウグスティヌス 著　河野一典／松﨑一平 訳

40年以上の歳月をかけて、『アウグスティヌス著作集』ついに完結！　詩編作者の声に聴きながら、絶えず主イエス・キリストの姿を描く本注解は、教会史上の傑作と呼ばれる。本書には123―150編を収録。

● A5判・上製函入・964頁・定価12,100円

発行所　〒162-0814　東京都新宿区新小川町九―一　一般財団法人キリスト教文書センター
電話〇三―三二六〇―六五二〇　振替〇〇一七〇―五―一一六七九
発行人　金子和人　編集人　桑島大志　印刷所　モリモト印刷㈱
発売所　日本キリスト教書販売株式会社　電話〇三―三二六〇―五六七〇
定価七八円（税抜七一円）（〒63円）
一年分一三〇〇円（送料共）

教文館　〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3561-5549（出版部直通）《星・図書目録》
キリスト教の書籍やCD、グッズのご注文は〈e-shop 教文館〉
http://shop-kyobunkwan.com/ まで！

本のひろば.com